

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。  
 「注意」 本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところが  
 あります。

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。各段落の上についている数字は、段落の番号です。

- 1 道具には、それが目的によって作られて、そして使われ、捨てられるという一生がある。縄文土器が道具として彼らの生活に利用されていた当時、やはり同じような考えがあったに違いない。これを「縄文土器の一生」と呼ぶことにしよう。
- 2 縄文時代のムラや貝塚などから出土する土器は、壊れて捨てられた状態で発見される場合が圧倒的に多い。つまり、土器はその一生を終えた状態で遺跡に埋もれているのである。その出土の状態はまちまちで、細かい破片となつて出てくる場合や、ほぼ完全な形をそのままに保つて発見される場合など、さまざまだ。
- 3 遺跡の発掘で、完全な形に復元できる土器を発見したとき、わたしたちは喜びとともに、反面で、この土器はなぜ完全なままで捨てられたのだろうか、と疑問に思うこともある。それがひとつではなく、多数にのぼる場合には、さらに疑問が大きくなる。
- 4 しかし、この疑問は鉄やアルミニウム製の鍋を使い慣れているわたしたちの生活感覚からの発想であつて、はたして(1) 私たちと同じ考えが縄文時代にもあつたかどうかはわからないのだ。だから、この疑問は、その発想の根本から考え直す必要があるだろう。
- 5 まず遺跡から出土した実物をよく観察してみることにしよう。わたしが観察したのは、長野県にある縄文中期の遺跡の住居跡から発見された土器だ。ここから発見された土器はたんねんにつなが合はれていて、ほぼ完全に復元されたものがたくさんある。これらの大きささまざまな土器の表面を観察してみると、バケツ形の深鉢は、どれも胴部より上にすずが付いて黒っぽくなつていて、反対に底の付近は赤く焼けただれていて、さらに内側を見ると、底よりやや上の部分にお焦げがベルト状についている。これは煮炊きに使つた場合に付く特徴的な跡だ。だから、大量に発見された土器の大半が道具として使われていたものであることが、こうした文様や形以外の特徴を観察することによってわかる。
- 6 それでは、なぜたくさん土器が何か所に捨てられたのだろうか。
- 7 たとえば、貝塚を例にとつてみてもわかるように、人びとは貝殻などのごみをどこにでもあたりかまわず捨てたのではなく、ムラのなかの決まった場所に集めたので、貝塚として残つたのである。これと同じ理屈で、土器も道具としての一生を終えたものは、使われなくなつて凹地として埋もれかけた堅穴住居跡や、住居の作られた台地の斜面などの決まった場所に捨てられたと考えるほうが合理的に説明ができる場合が多い。とくに引越しが済んで埋もれた堅穴住居跡の凹地にたくさん土器を捨てるという習慣は、縄文中期の東日本でよく見られる。
- 8 小林達雄氏は、こうした土器の大量廃棄の理由として、土器の文様を新しいものに変える時に、それまで使つた土器をモデルチェンジの目的でいっせいに捨てたものだろうと考へた。縄文土器を新しい文様に変える時の流儀ともいうべき行為のひとつとして、ムラの中の廃屋に土器を捨てる場面を想定した、大変に興味深い指摘である。(2) たしかに、長いくらしの中で、新しい文様が考えだされると、それまでの古い文様を捨て去ることがあつたのかもしれない。しかも縄文時代は土器が各ムラで大量に作られているのだから、一時期に大量に捨てたとしても、すぐに新しいもので補充できるような土器づくりの体制があつた可能性もある。
- 9 わたしは縄文土器の復元製作や使用実験をしながら、この問題についてよく考える。縄文土器は素焼きの器であり、土器を煮炊きに使つていくと、もつとも赤く焼けた部分に細かい亀裂が入り、やがて煮炊きの効率が低下してしまうのである。こうした事実は金属製の鍋を使っている現代のわたしたちには、なかなか想像もできないことなのだ。道具としての土器のこの特性に気がついたとき、わたしは土器の並ぶ薄暗い収蔵室の片隅でひとり感動した。
- 10 こうした実験の成果をもとにすると、考古学者が「完全なわたしたちの土器」といつているものと、「まだ使える土器」とは、かならずしもイコールで結ばれるわけではないことがわかるだろう。だから遺跡から完全な形で復元できる土器が出てくる理由も、たとえそれが形は完全であっても、使い古されたものではないかどうかということも、もう一度くわしく調べてみる必要がありそうだ。

22	中
国	—
2	5

11 さきに指摘した竪穴住居からの土器の大量出土の状態は、約五〇〇年前の中期の東日本に集中していて、しかも、いくつかの土器型式の時期にわたってムラが営まれつづけた遺跡に発見例が多いのだ。さらに、この時期の多くの土器は、赤焼きの厚手で豪快な文様の土器であるという点も一致している。

12 土器の一生のうちで、その(3)「最後の場面」を発掘によって発見するところから、わたしたち考古学者の研究がはじまる。そして、まずその発見の場面からさかのぼって、土器が作られた場面にまで立ちもどって復元してみる必要がある。そのために、縄文人の(4)「生活の道具として縄文土器を考えること」がとても重要になってくるのだ。

(阿部芳郎『縄文の暮らしを掘る』による)

問一 ——(1)「私たちと同じ考え」とはどのような考えですか。

問二 ——(2)で用いられている「たしかに」ともつとも近い働きをしている「たしかに」を含む文を一つ選びなさい。

ア たしかにお客様のご要望は上司にお伝えしましたが、いかがでしょうか。

イ たしかに上空を横切る銀色の飛行機の姿を見たが、音は聞こえなかった。

ウ たしかに品物を受け取ったのかどうか、もう確認のしようのないことだが。

エ たしかに動物の巣のようにも見えるが、私は人工的なものではないかと思う。

オ たしかに遠くで兵士の鳴らすラッパの音が聞こえたが、誰も来る気配はなかった。

問三 文中で示されている疑問を二つに分けて考えることにします。その二つの疑問を、示された順番に解答欄の(ア)(イ)の欄に本文から抜き出して書きなさい。

問四 問三で書き抜いた(ア)(イ)の疑問について、小林達雄氏と筆者の意見の違いを、表にまとめなさい。

問五 問四で答えた筆者の意見の根拠が書かれている段落の番号を、(ア)(イ)についてそれぞれ数字で答えなさい。

問六 ——(3)「最後の場面」とはどのようなときですか。一つ選びなさい。

ア 土器が作られるとき。

イ 土器が使われるとき。

ウ 土器が壊れるとき。

エ 土器が捨てられるとき。

オ 土器が埋もれているとき。

カ 土器が発見されるとき。

問七 ——(4)「生活の道具として縄文土器を考えること」とはどのように考えることですか。次の空欄にあてはまることばを、(ア)は本文から抜き出し、(イ)は本文のことばを使って書きなさい。

土器の( )ア( )の特徴を観察するのではなく、土器が( )イ( )を考えること。

□ 六年生の慎は、働いている母と二人でM市にある団地のC棟の四階で暮らしています。四十キロ離れたS市に住む一人暮らしの祖父が倒れてしまったので、慎と母は祖父宅で寝泊まりし、S市からM市にある学校や勤め先へ通うことになりました。慎は学校の道具を用意するために自宅に寄ってから登校します。以下の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

十一月のある日、慎は学校で数人から本をもってくるように命令された。※手塚治虫のサイン本だ。貸せという話だったが多分返してはもらえないだろう。学校から帰宅すると忘れられないように手提げにいれて、明朝、団地に戻ってきたときすぐに手に取れるように玄関に置いた。

翌朝は月に二度の※早出の日だった。二人は夜明け前にS市を出発した。団地については午前六時をまわったところだった。慎は母に起こされた。外はまだ夜の暗さだ。

二人ともうっかりしていた。母はC棟の前に停めて、キーをさしたまま車のドアを閉めてしまった。慎も家の鍵のついたキーホルダーを助手席においたままドアを閉めていた。母は焦げたパンをみるような目でドアをみた。恐ろしい沈黙が続いた。

「手提げがないと学校にいけない」慎はおずおずと試してみた。

「今日はもう仕方ないから、そのまま学校にいきなさい」母は慎の方をみない。車の処置のことで頭がいっぱいのようにだ。

「でも」

「でもなに」(1) 慎の「でも」よりも速い言い方だった。

「手提げに大事なものでも入っていたのかい？」

「書道の道具」(2) 慎は嘘をついた。

「事情を先生に言って、友達に借りなさい」

「でも」

「でも、いったいなんなのさ」母の苛立ちはどんどん高まっていた。

「この状況が分からないの。どうしたらいいっていうわけ」慎は黙った。母は自分の家のベランダのあたりを見上げた。

霧が出てきた。霧は土手の向こうからきて、団地全体を包み始めている。

「わかった、もう」と母はいった。なにをどうわかったのか、母は慎を押しつけるようにして歩き出した。団地の側面まで行くと、梯子に手をかけた。そのまま上を見上げている。夜が明けつつあった。慎が追いつくと「誰かこないか見張って」といって母はブーツを脱いだ。でも、という言葉(3)の飲み込んだ。さつきから何度「でも」をいったらう。何を思ったか母はストッキングも脱いで裸足になった。コートのボタンもはずすと慎が驚いているのも構わずに梯子を登り始めた。

母はどんどん登っていった。

霧が母を包み始めた。かすんではいるが、母が登っていくのはみえた。周囲は明るくなってきている。母はやみくもに登り続けたわけではなかった。

「今、四階？」朝霧を含んだ空気が母の声をかすかにこだませた。慎はまだ母がなにをしようとしているのか(4) 飲み込めていかなかった。

「四階だよ」母は慎の返事を待っていないかった。母はちゃんと横をみて確認しながら登っていたのだ。

母は梯子の左端に寄ると、左手を端の家のベランダの手すりに伸ばしはじめた。届かないと分かると、今度は左足も大きく宙に踏み出した。右手右足を梯子に残したまま、体を思い切り伸ばす……と左手が手すりにかかった。

慎はあわてて周囲を見渡した。ウインドブレーカーを着た男が不意に団地の脇から現れた。C棟の脇を巻くようにして、慎には※一瞥もくれずに走り去っていった。慌てて慎は上をみた。母も動作をとめ、鋭い目つきでウインドブレーカーの男をみつめている。

22
中
国
4
5

母は再び手を伸ばした。霧は土手の向こうから広がってきている。さらに濃くなるだろう。  
 慎の体はすくみつばなしだった。母の左足のつま先が、端の家のベランダのでっぱりにかかり、左手が ※鉄柵をつかむと母はためらわずに重心を移動させた。右手と右足をベランダの方に移す。

(中略)

「どこにいるの」と声がしたとき、まだ慎は何もみえない上空を見上げていた。誰に呼ばれたかも一瞬分からなかった。「慎」母が自分の名前を呼んでいる。近くか遠くか、上からなのか横からなのかも分からない。返事をしようとしたら口の中が乾ききっていることに気付いた。慎も霧の中にいた。慎の名を呼ぶ声が団地の間をかすかに反響している。ずいぶん長い間、慎という名前を呼ばれていなかったような気がする。声の方向がだんだん定まってくる。小走りで近づいた。突然目の前に姿をあらわした母に慎はぶつかりそうになった。お互いすこし驚いて、顔を見あわせた。母はだらんと下げた手に手提げ袋とキーホルダーを持っている。

母はほら、と行って手提げを手渡した。(5) 書道の道具の入っていないことは明らかだが、なにもいわない。

(長嶋有『猛スピードで母は』による)

※注 手塚治虫漫画家(一九二八〜一九八九)。

早出 母が早朝出勤であること。

梯子 団地の建物の側面の最上部から地上二メートルぐらいのところまでに取り付けられている梯子。

ふつう住民は使わない。

一瞥もくれず ほんのちよつとも見ないで。

鉄柵 べランダの手すり。梯子がついている面と直角に隣り合う別の面についている。

問一 (1) 「慎の』でも』よりも速い言い方だった」とありますが、言い方が速くなったのはなぜですか。

問二 (2) 「慎は嘘をついた」とありますが、嘘をついたのはなぜですか。

問三 (3)と(4)の「飲み込む」の意味の違いを、「(3)は……という意味で、(4)は……という意味。」という形で答えなさい。

問四 (5)「書道の道具の入っていないことは明らかだが、なにもいわない」とありますが、もし自分が慎だったら、母の態度をどう受け止めて、どのような気持ちになったでしょうか、本文をふまえて想像して書きなさい。

22	中
国	—
5	—
	5

三 次の詩を読んで後の問いに答えなさい。

母はサボテンが好きだ

小野省子おのしょうこ

台所に

(1) ぬぼーっとと並んでいる

トゲだらけの縁頭に

(2) 時々ひっそり

話しかけている

「何がかわいって

手がかからない所よ」

(3) 私は少し口をすぼめて

父を見る

父は新聞ごしに

母を見る

何か言われそうな

予感がする

問一 —— (1) 「ぬぼーっと」から、何のどのような様子が想像できますか。

問二 —— (2) 「時々ひっそり／話しかけている」とありますが、話しかけているのはなぜですか。

問三 —— (3) 「私は少し口をすぼめて／父を見る」とありますが、私がいかに父を見るのはなぜですか。

四 次の文を、カタカナは漢字に直し、ていねいに大きく一行で書きなさい。

シるモノはイわず、イウモノはシらず。